

ヘンリー・ジェイムズの幽霊物語

——「ねじの回転」と静寂

瀬尾素子

I

Henry James は1868年に “The Romance of Certain Old Clothes” を書いて以来1908年の “The Jolly Corner” まで幾つかの幽霊物語を書いているが、1898年に *Collier's Weekly* に連載され同年刊行された “The Turn of the Screw” は最も多くの読者を得、又、議論の沸騰した幽霊物語であった。この作品に対する華々しく多岐にわたる議論の論点は概ね幽霊は実在するのか或いは語り手である governess の幻覚にすぎないのかという点にしばられていると言える。

幻覚説は Edmund Wilson が governess を “a neurotic case of sex repression”⁽¹⁾ と断じたことで一躍有名となった。彼はフロイトの精神分析学を応用して governess の異常心理と潜在意識に光をあてて、超自然的な幽霊物語を明快に白日の下にさらしている。governess の一人称の視点にありありと感じとれる感情の揺曳の激しさと、彼女の告白以外に幽霊の実在を確認する方法がない点を考えあわせて、幽霊は彼女の見た幻覚にすぎないという合理的結論をひきだすこのフロイト派の立場は実に明快であり、governess の潜在意識の分析に説得力をみせる。だが、幽霊実在説をとる人々を完全に沈黙させてしまえない部分をも “The Turn of the Screw” は確かに内包しているのである。「その家庭教師は、自分が一度も見たことも聞いたこともない死んだ男の、完全に正確で、寸分違わぬ心像を、どのようにしてその潜在意識から虚空に投影できたのであろうか？」との A. Waldock の幻覚説への反論は、その点に関してはフロイト派の分析も決定的証拠に欠けて推測の域を出ないだけに、幽霊実在説の有力な根拠となっている。さらに幽霊実在説を主張する人々は、幽霊の実体を求めてそこに善と悪の闘い、楽園喪失の寓話等の象徴的意味を見出している。

だが、この二派の議論は、双方共に完全に議論として成立し得るだけの根拠があるにもかかわらず、議論に決着をつけ完全に相手を沈黙させてしまうだけの決定的な根拠をもたないのである。それ故、この一方に完全に方向づける決定的な証拠の欠如を作者自身の曖昧性からくる不手際に帰して “The Turn of the Screw” は失敗作であるとさえ言われたこともあった。だがこの一方への決定的な証拠の欠如こそこの作品を深層心理学の臨床

記録にも超自然的実在に対する証言にもせず、その両者の間で絶妙なバランス関係を保ちながら純粹に虚構の次元に於て美的に“air of evil”⁽³⁾の雰囲気をもりあげる作者 Henry James の意図された曖昧性であり、優れた story-telling の手法なのである。先に述べた二派の議論はいずれも認識の世界へ結論づけようとして失敗していると言える。ゴシック・ロマンスにおいては、確かに超自然への直面は恐怖の中に感情の開放を求めて極端に走り、現実か超自然かの一方への認識の選択に帰結したと言われる。即ちウォルポールや M・G・ルイス等の様に超自然的世界がいかに説明もつかぬまま厳と存在するのかを認識或いは容認して恐怖を増幅させるか、ラドクリフ夫人の様に最後はすべて合理的説明即ち人工的トリックによる説明で解き明かして恐怖感を結末部分でひっくりかえしてサスペンスの落差を拡大しつつ日常世界の枠の堅固さを確認するかであった。“The Turn of the Screw”は原稿、塔のある古い大きな館、闇夜、幽霊とゴシック・ロマンス的枠組を巧みに借用している⁽⁴⁾。その為、実際には絵解きが完全に欠如することで成立しているこの作品を、結末において解決という認識の世界へ持ち込もうとして、両派の議論は失敗していると言えるのである。

科学の発達、闇の追放、白日化、人間の死の散文化によって超自然への恐怖はもはやゴシック・ロマンスの様な形では人々の想像力をかきたてなくなっている。魔性の多くは失われ、超自然の存在主張は誇張と承認をもってなされることなくひっそりと現実世界の間に身を潜めた。一方心理学精神分析学が幻覚、人間の屈折心理、内面の迷路といった現実世界に容認されているものの内に潜むものの探究をはじめ、ある意味で現実世界は容認しがたき超自然の領域へと接近してきたと言われる。この様な状況の中で Penzoldt は“*The Turn of the Screw*”を心理的幽霊物語の項に分類しているが、⁽⁵⁾尚一層この作品に当てはまると思われるのは、トドロフ、カイヨワ、ルイ・ヴァックス等の言ういわゆる幻想小説の定義である。⁽⁶⁾

「確かに我々のものである世界、日常的な不変の適法性に支配された明るく堅固で安心できる世界に、理解しがたき容認しがたきものが突如として侵入して来る時、幻想とは自然の法則しか知らぬ者が超自然的様相を持った出来事に直面して感じるためらいのことである。つまり超自然に遭遇して幻覚か実在かの二通りに説明され得る時、どちらをとるかというためらいの可能性が幻想の効果を生み出す。⁽⁷⁾」というのがトドロフ等の定義である。さらにこのためらいの支配する領域を描き出すについて、ソロヴィヨフは「真の幻想においては、現象についての素朴な説明の可能性が、外的、形式的には常に残されているが、同時に、そうした説明には内的蓋然性が完全に欠落しているものである。⁽⁸⁾」と述べ、M・R・ジェームスは「自然な説明へと通じる出口を用意しておくことも、ときとして必要である。ただし、そうした戸口が、十分に狭く作ってあって、実際には使用しがたいのでなければならない。⁽⁹⁾」と規定している。先に述べた両派に分れる華々しいが決着のつかない議論は

まさに確認の領域へ至る使用不可能な扉をあけようと躍起になってかえってその扉の実在性とその使用不可能性という幻想小説に不可欠な仕掛けを作者が意図的に施しておいたことを明らかにしていると言えよう。今一つ幻想小説を隣接のジャンルとの区別によって規定しておきたい。幻想小説は日常現実世界に基盤を置いており、その亀裂が生み出す相克とためらいを描く純粋に虚構的世界である。一方、同じ超自然を扱っても詩の領域では、想像力の飛翔に身を委ねて現実から超自然という別世界にはこぼれるのであって、そこに何ら相克もためらいも生じない為幻想小説とは明らかに異なるのである。

Henry James は、幽霊の実在、幻覚いずれの解釈をも可能性の扉として形式的に残しつつ、その確認の世界への扉を双方共に意図的に閉ざして通行不可能にすることにより、ためらいの支配する領域を純粋に虚構の次元において“evil”の実体ではなく“air of evil”として入念に描き出している。認識の領域を意図的に閉ざすことによって生じる幻想効果を、以下作品全体を支配する静寂の考察によって跡づけて、優れた story-telling の手法を駆使してきわめて意図的に仕上げられた純粋に“a story as a story”としての“The Turn of the Screw”の世界を明らかにしていきたい。

II

“The Turn of the Screw”は、作品全体に静寂がみちている。そもそも Bly 館自体が静けさに支配されている。サセックスの田舎、村の教会まで徒歩二十分のこの館は、多くの空部屋に來訪する客も無く、住人は語り手である governess、二人の子供達、家政婦の他は何人かの召使のみである。深閑としてはいるが別に荒涼としているわけではない。美しい自然に囲まれた Bly 館は、陽光ふりそそぎ鳥のさえずりや子供達のさざめきが時折静寂を破る以外は平和な静けさにみたまされている。そこに見知らぬ男がたたずむ時、この平和な静けさは一挙に変質する

I can hear again, as I write, the intense hush in which the sounds of evening dropped. The rooks stopped cawing in the golden sky and the friendly hour lost, for the minute, all its voice. (p.27)

最初の幽霊出現の場面である。そこに墓地や地下室、廃墟、暗黒の森、雷鳴等ゴシック・ロマンスに付き物の超自然出現の為のおどろおどろしい舞台装置はない。日常慣れ親しんでいる好ましく平和なたそがれ時の静けさが、外見は何ら変化せずに異様な死の静寂に変質するのである。明るく堅固で安心出来る日常現実世界に尋常ならざるものがゆるやかに忍び入ったのである。しずかに日常世界に亀裂が生じ、日常世界の堅固さへの信頼はためらいに変る。この時点においては governess はまだ竹んでいる男が誰であるかを知らない。もちろん幽霊と思っているわけではない。ただ周囲の平和な静けさが明らかに変質

してしまった事をいたい程感じているだけである。“evil”の実体の提示ではなく、その“air”が描き出されている。さらにこの異様な死の静けさを倍加させているのは、その見知らぬ男と governess の間に交される“straight mutual stare”であり、その沈黙の生み出す“hush”(p. 28)なのである。沈黙の凝視が静けさの緊張感を一層たかめている。

この二重に異様な静寂を体験した後には、以前の何もおこらなかつた頃の単一で平穏な静けさへそのまま回帰することは不可能となる。明るく堅固で安心出来る日常世界の静けさ、その秩序と安定への信頼は二度と戻らない。governess は以前を振り返って次の様に思う。

It may be, of course, above all, that what suddenly broke into this gives the previous time a charm of stillness—that hush in which something gathers or crouches. The change was actually like the spring of a beast. (p. 25)

異常な静寂が闖入するのを目の当たりに体験し、今まで信じて疑わなかつた日常世界に亀裂の生じるのを感じ、自らが今在る世界への確信がゆらいでためらいに変る時、その亀裂に目をおおって日常世界に安住することは出来ない。自らが今在る日常世界は、いかに堅固にみえようとも、いつ又やすやすと尋常ならざるものの侵害を許すかもしれないのである。日常世界の秩序が回復しないかぎり、彼女は二度とそこの安住者にはなれないのである。はじめて幽霊に遭遇した際の、あの死の静寂から受けた衝撃は、当然二度三度繰り返される内には強烈さを失ってくる。体験の繰り返しは慣れを生み、慣れた分だけ確実に日常世界の堅固さへのためらいの領域はひろがる。静寂は単一な平穏さと明るさを失って、幾重もの層をなしてためらいの領域の空間をみたくす。

governess が湖で Miss Jessel の幽霊にはじめて遭遇する時、周囲は夏の明るさにみちて静まりかえっている。

The old trees, the thick shrubbery, made a great and pleasant shade, but it was all suffused with the brightness of the hot, still hour. There was no ambiguity in anything ...There was an alien object in view. (p. 44)

日常的静けさのただ中に異質なものが闖入し日常世界の秩序を失わしめるさまが、静けさの中に確実に繰り返される。Flora が不自然に黙り込んでその沈黙と静寂を倍加している。二度目に Miss Jessel と遭遇する時には“the Sunday stillness” (p. 82) としか静けさという言葉は用いられていないが、家人全員が教会に出かけた無人の Bly 館で無言の内に幽霊と対峙する governess をとりまく静けさがはっきりと伝わってくる。

深くただならぬ静寂が一層存在感を帯びるのは Quint の幽霊と三度目に出会う時である。

I can't express what followed it save by saying that the silence itself ... became the element into which I saw the figure disappear. (p.59)

Quint と governess の間に交される長い凝視が生む死の様な沈黙は濃密に存在感を増してゆき、遂には沈黙は一つの“element”に化して、Quint がその中へ消えていけるだけの存在感を帯びて空間をみたすのである。現実に対する信頼感がゆらいでゆくにつれて、沈黙が存在感を帯びてためらいの領域をみたす。日常世界の静けさに異質な静けさが幾重にも重なりあったこの静寂の世界は、幻想の雰囲気を一層もりあげる。夏から秋へと移りゆく Bly 館の描写は、ひっそりと印象的に、この幻想性にみちた静寂の世界を描き出す。

The summer had turned, the summer had gone ; the autumn had dropped upon Bly and had blown out half our lights. The place, with its grey sky and withered garlands, its bared spaces and scattered dead leaves, was like a theatre after the performance —all strewn with crumpled playbills. There were exactly states of the air, conditions of sound and of stillness, unspeakable impressions of the *kind* of ministering moment, that brought back to me, long enough to catch it, the feeling of the medium in which, that June evening out-of-doors, I had had my first sight of Quint. (p.73)

さらに、日常世界の単一で安定した静けさに闖入して静けさを変質させる幽霊の存在について考えてみたい。governess は最初に幽霊と遭遇した際、彼を幽霊だと思ったわけではない。だが、周囲の平常な静寂が変質してゆく中で一層異質に感じたのは彼の無言の凝視の視線の生む沈黙の緊迫感であった。

It lasted while this visitant, at all events ... seemed to fix me, from his position, with just the question, just the scrutiny through the fading light, that his own presence provoked. We were too far apart to call to each other, but there was a moment at which, at shorter range, some challenge between us, breaking the hush, would have been the right result of our straight mutual stare. (pp.27—28)

凝視の視線以外は全く平凡なその男の外見を家政婦に詳しく話すと、家政婦は即座にその男は governess がこの館に来る前に死んだ下男の Peter Quint であると断言し、governess は見知らぬ男が亡霊であったことを知るに至る。この箇所は先に述べた様に幻覚説論者の論証の爾切れが悪くなる分、最も幽霊の実在確認に近づいていると言えよう。秩序に支配された堅固な日常世界に尋常ならざるものが密やかに忍び込んでいたのである。

だが、尋常ならざるものの実在性の確認の可能性は、上記の家政婦の断言を頂点として、governess の確信と反比例する様に、薄らいでくる。家政婦、Flora と三人で幽霊に遭遇しても他の二人には見えず、却って governess の方が非難される。governess 以外に幽霊を見た者がいない上に家政婦や子供達が彼女の言動の方に異常を感じる時、幻覚の可能

性は限りなく増す。幽霊の存在を確認して幽霊も含めた日常現実世界の秩序を回復する道は閉ざされてしまう。しかも、家政婦が幽霊を **Quint** と断言する箇所では幻覚説論者の論証の歯切れが悪くなるという事実は、**governess** の幻覚を論証して日常世界の秩序を回復する道も閉ざされていることを明らかにする。既に述べて来た様に、確認の世界は双方共に意図的に閉ざされている。幻想の領域は、まさに双方への確認の道が閉ざされた時に生れる、ためらいの支配する領域なのである。侵入した尋常ならざるものが怪物や怪奇現象ではなく幽霊であるのも幻想効果をたかめるのに適している。幽霊は日常世界とは決定的に異質な存在でありながら過去において確かに日常世界の秩序を構成する一員でありそこから決定的に失われたものなのである。それ故に幽霊は人間心理にためらいを呼びやすいのである。

静寂のみなげる幻想領域で、実在幻覚共に確認の道を閉ざされた異質なものであるものとしての幽霊は、その凝視の視線と、その生み出す沈黙の静寂性によって存在を主張する。

It was the dead silence of our long gaze at such close quarters that gave the whole horror, huge as it was, its only note of the unnatural. If I had met a murderer in such a place and at such an hour we still at least would have spoken.... The moment was so prolonged that it would have taken but little more to make me doubt if even *I* were in life. (p.59)

一言も声を発さず、ただ凝視の目を向けてくるだけで周囲の静寂に緊張感が加わる。凝視の視線は “fix”, “bold hard stare”, “he never took his eyes from me”, “his stare into my face”, “dead silence of our long gaze” 等々繰り返して様々に描かれて効果をあげている。少しもおどろおどろしくない我々と変らない平常の外見を持ち、犠牲者に直接手をかけることもなく、声も発さず、暗闇も特殊な舞台装置も必要とせず、幻覚の可能性を残しつつ、白昼そのまま姿をさらす “The Turn of the Screw” の幽霊の、無言の凝視の視線は、確認の世界を閉ざされたこの作品における彼らの唯一の存在主張として、確かに日常世界の亀裂を拡げ静寂の濃密さを増していくのである。

静寂は、周囲の自然、幽霊の出現、その沈黙の凝視によるものだけではない。語り手である **governess** 以外の登場人物は皆、沈黙の静寂の中に陥っている様に思われる。以下、子供達の沈黙をとりあげて考察してゆくが、その前に **governess** をとりまく **Bly** 館の人間関係を考えてみたい。時折給仕等に現れては空気の様子に無言で去っていく女中や召使は登場人物とも言えないので、**governess** をとりまく人々は家政婦と二人の子供達ということになる。ここで気づくのは、**governess** の告白を論理と確信をもって否定なり肯定なりの判断を下して確認の扉を開くべき大人の第三者がいないことである。同じく一人称の語り手が語る **Henry James** の幽霊物語に於ても、“**Sir Edmund Orme**” では語り手

の幽霊目撃を支持しその正体を説明してくれる Mrs. Marden がおり、“The Friends of the Friends” では語り手の女性が嫉妬で半狂乱になって幽霊の恋人と会っているにちがいないときめつける時の婚約者の男性の無然とした返答は、語り手の女性の嫉妬故の妄想性を浮び上らせる。だが Bly 館では Miles と Flora はほんの子供にすぎない。彼等は利発で、この世慣れぬ governess に迎合する方法をこころえ、天使の様なしぐさで甘えかかるが、問いつめられるとわめきちらしたりおどおどして、所詮 governess と筋道の通った対話の出来る相手ではない。又、家政婦の Mrs Grose も名前通りの女性で、悪気はないが迷信深く付和雷同的な無教育な女である。governess の見た正体不明の男を Quint の亡霊と断言するのも彼女ならば、governess の恐怖にあいづちをうってそれを増幅するのも彼女である。そして一旦自分には幽霊が見えないとわかると途端に力を得て governess 非難の側にまわり、再び彼女に問いつめられると幽霊を “I believe.” (p. 107) と言ってしまう。この様に唯一の大人である Mrs Grose が付和雷同的性格である時、governess の周囲には彼女を確認の世界へ導く大人の第三者は存在しない。

超自然の侵入に対して日常世界の秩序を回復する為には、確信を事実に変える証拠が必要である。彼女が幽霊の実在を確認していたことは “confidence” の頻用や “certitude” “conviction” の連発、“absolute” をつけた表現の多さからも明らかであろう。この確信を立証するべく “proof” と繰り返す governess の立証願望は激しいものである。家政婦や Flora と共に幽霊に遭遇した時、彼女は Flora を幽霊から護るよりも、まず第一に “thrill of joy at having brought on a proof” (p. 98) を感じてしまう程である。だが、認識の世界が意図的に閉ざされている “The Turn of the Screw” において、証拠が決定的なものになることはない。彼女は終始立証され得ない確認の世界を求めて “further proof” (pp. 69-70) “further evidence” (p. 55) と繰り返しながら、ためらいの領域に封じ込められて堂々めぐりをするしかないのである。彼女の状況は、肯定にしる否定にしる彼女の証言をしっかりと受けとめてくれる第三者の欠如によって、一層助長されている。“It’s you that are alone most.” (p. 114) という Miles の言葉は、まさに的を射ていると言える。

その上、二人の子供達はしばしば沈黙に陥って governess をますます一人きりにしてしまう。この沈黙の内、幽霊出現に居合せた子供が一言も発しなくなる場面は、幽霊出現時の静寂効果をたかめるものとして、幽霊の凝視の視線の生む沈黙と同質のものと言えよう。Miss Jessel の幽霊出現の際に二度居合せた Flora は、二度共自然とは言いがたい沈黙に陥っている。一度目は “All sounds from her [i.e. Flora] had previously dropped.” (p. 44) という風に、又二度目は “in silence…ominous” (p. 97) と語られている。

もう一つの子供達の沈黙は、信頼すべき第三者の欠如と同じく彼女の孤立感を誘発する

ものである。

I chattered more than ever, going on volubly enough till one of our prodigious, palpable hushes occurred — I can call them nothing else — the strange, dizzy lift or swim (I try for terms !) into a stillness, a pause of all life, that had nothing to do with the more or less noise that at the moment we might be engaged in making and that I could hear through any deepened exhilaration or quickened recitation or louder strum of the piano. (p. 75)

沈黙の内に彼等が幽霊と秘かに交わっているのか、単に子供らしい沈黙にすぎないのかの論議は、確認が閉ざされている以上、不毛に終るだけである。governess は沈黙が破られることによって、彼女待望の proof が得られると確信している。彼女は “He [i.e. Miles] wants to speak.” (p. 105) とさえ思うのだが、沈黙は遂に破られることなく、認識不能の世界から出ることが出来ない。彼女は子供達の沈黙の世界にとらえられている。“systematic silence of each” (p. 68) “absolute stillness” (p. 102) 等々と描かれる子供達の沈黙は governess をためらいの領域に封じ込めて静寂を一層深める。特に、最後に Miles と二人きりになった governess が感じる「ピンの落ちる音さえ聞こえそうな Miles の沈黙」(p. 116) は静寂の緊張感をたかめて効果的である。

この様な状況の中で governess の周囲には呼べど答えぬ静寂のみが幾重にもとりまいている。Bly 館の静けさ、幽霊出現の死の静寂、幽霊の無言の凝視の生み出す沈黙の静けさ、日常世界の安定と秩序に回帰する為に必要な第三者の欠如、しばしば governess を疎外して沈黙に陥ってしまう子供達。あれほど彼女が躍起になって見出そうとした証拠も遂に無く、確認の世界を閉ざされて、ためらいの領域に封じ込められた governess の叫びさえも幾重もの静寂の中に吸収されてしまう。Mrs Grose と Flora が去り、幽霊も去った最終場面で governess の手元に残ったのは息絶えてもの言わぬ Miles だけであった。

I caught him [i.e. Miles], yes, I held him — it may be imagined with what a passion ; but at the end of a minute I began to feel what it truly was that I held. We were alone with the quiet day, and his little heart, dispossessed, had stopped. (p. 121)

静寂があたりを支配して物語は終る。認識の世界を意図的に閉ざして幾重にもとりまく静寂の層を細心に積み重ね、その中に幻想効果をもりあげた “The Turn of the Screw” は純粹に虚構の次元の中に、きわめて意図的に入念に仕上げられた優れた幽霊物語なのである。

注

“The Turn of the Screw” の引用は Penguin Modern Classics による。

- (1) Edmund Wilson, "The Ambiguity of Henry James", *A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw"* ed. by Gerald Willen (New York : Thomas Y. Crowell Company, 1969), p. 115.
- (2) A. J. A. Waldock, "Mr. Edmund Wilson and *The Turn of the Screw*", *A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw"* p. 173.
- (3) Henry James, *The Art of the Novel* (New York : Charles Scribner's Sons, 1934), "Good ghosts, speaking by book, make poor subjects, and it was clear that from the first my hovering prowling blighting presences, my pair of abnormal agents, would have to depart altogether from the rules. They would be agents in fact ; there would be laid on them the dire duty of causing the situation to reek with the air of Evil. Their desire and their ability to do so, visibly measuring meanwhile their effect, together with their observed and described success—this was exactly my central idea."(p. 175)
cf., Ibid., p. 176
"Only make the reader's general vision of evil intense enough, I said to myself—and that already is a charming job—and his own experience, his own imagination. his own sympathy (with the children) and horror (of their false friends) will supply him quite sufficiently with all the particulars. Make him *think* the evil, make him think it for himself, and you are released from weak specifications."
- (4) 元田脩一『アメリカ短篇小説の研究・ニュー・ゴシックの系譜』(南雲堂, 1972) p. 172
- (5) Peter Penzoldt, *The Supernatural in Fiction* (London : Peter Nevill, 1952) p. 54.
- (6) ツヴェタン・トドロフ『幻想文学・構造と機能』(渡辺明正・三好郁朗訳, 朝日出版社, 1975)
原題 : *Introduction à la Littérature Fantastique*
ロジェ・カイヨワ『妖精物語から SF へ』(三好郁朗訳, 株式会社サンリオ, 1978) 原題 :
Images, Images : Essais sur le rôle et les pouvoirs de l'imagination
ルイ・ヴァックス『幻想の美学』(窪田般彌訳, 白水社, 1961) 原題 : *L'Art et la Littérature Fantastiques*
- (7) トドロフ『幻想文学』pp. 40—41
- (8) 同上 p. 41
- (9) 同上 p. 42
- (10) Henry James, "The Friends of the Friends", *The Novels and Tales of Henry James* Vol. XVII (New York : Charles Scribner's Sons, 1909), p. 362.